温故知新 古民家に学ぶ

「観」住まい

日本家屋の伝統構法＝宇宙律

このシリーズ広告のタイトル「観・住まい」は、文字通り、住まいを観じる、の意だが、同時に、住まいを通して宇宙律を観じる、の意でもある。

宇宙、そしてその一部である地球も人間も、生きとし生けるものすべては、あらゆる部分でつながり合い、支え合いながら、生きて脈動するひとつの生命。この大いなる生命は、部分＝全体、ひとつ＝すべての関係で成り立っており、瞬時の休みなく変化し続け、進化し続けている。

この関係を「住まい」という形で表現したものが、正に日本古来の伝統構法でつくられた家そのものに他ならない。

去年の暮、12月21日。夢木香・松尾代表の計らいで、とても深く、宇宙律を観じる機会を与えていただいた。

池田武邦さん、85歳。かつて、日本の超高層ビルの黎明期（60年代後半～70年代）建築家として一時代を画した人である。'49年に東大工学部建築学科を卒業。'67年に日本設計事務所（現・日本設計）の設立に参画。建築を手がけた霞ヶ関ビル、新宿三井ビルなどは、正に日本の超高層ビルの走り。

池田さんは、仕事の絶頂期にあった'70年代の冬のある日、自分が設計した超高層ビル最上階の快適なオフィスから、地上に降り立った。雪が舞い、震える寒さ。でも、なぜか安らぎ、心地よかった。天を仰ぎ「人間も自然の一部なのだ」と呟いていた。

以来、人工的な環境を前提とする建築に疑問を持つようになる。メビウスの帯が１８０度反転するように、気づきはどんどん深まり、それまでの自分の活動を全否定し、日本古来の伝統構法へと回帰していく…ひとつの極に達して始めて、１８０度の反転が可能になる。極に達しない限り、反転は起きず、同じ面（次元）を堂々巡りすることになる。反転しない限り、単なる抽象概念でしかない「表裏一体」が、１８０度反転することによって始めて、実体となる。この１８０度反転は、すべての創造の原理である。

現在、池田さんのお住まいは、大村湾に面して建つ、茅葺きの"和小家"。超高層ビルから茅葺きの和小屋へ。正に１８０度の反転である。

12月21日、午後2時。池田さんと対談するために、東京から来た増田一眞さん（木造の構造設計の第一人者。「伝統木構造の会」会長）、その他、出版社の方など、総勢9名で、茅葺きの池田邸にお邪魔した。

美しい茅葺き屋根から、うっすらと煙が漏れ出ている。池田さんに招じ入れていただき、靴のまま、玄関前の木づくりのベランダに上がった。大村湾の静かな波が、足元まで音もなく寄せてくる。足元の海水は澄み切って、「これ、本当に海？」と思う程。吹く風は枝を鳴らさず、鳥たちもさえずりをやめて小休止中。静かだ。

１００メートル先の海面上に立ち、こちらを振り返る自分をイメージした。静かな水面。まるでその水面上に建っているかのような、茅葺きの美しい和小屋。両者は全く違和感なく、ひとつに融け合っている。美しい！　瞬時に和み、アルファ波状態になった。

上に上がらせていただいた。中央に大きな囲炉裏。池田さんが毎朝の日課にしているという、雑巾がけ3回、雑巾がけ4回の成果だろう、板の間の艶が美しい。自在鉤の竹も煤で見事に黒光りしている。天井の茅もとてもいい色工合。自然に和む。各人、思い思いに囲炉裏の前に座る。しばし懐いの時…。メンバー紹介の後、お二人の対談は、さり気なく始まった。

85才とはとても思えない、池田さんのハリのある声。明瞭な言語。そして何よりもその自然さ。現在でも日本建築界のビッグネームでありながら、構えたところが全くなく、自然体。紛いものの権威を瞬面もなくひけらかす輩を見慣れた目には、新鮮で、とても心地よい。増田さん、然り。

建築理論のプロで、これ程見事に、誰にでもわかるように、日本の伝統構法の素晴らしさを語れる人はいないだろう。

「僕も、伝統構法がいかに理にかなったものであるか、長い間書いたり、しゃべったりしていますが、あれだけ書いたり、言ったりしても、専門家は見向きもしない（笑）若い人からは、"池田さん、それは先祖がえりですね"と言われてしまう（笑）専門バカじゃない、普通の人たちに伝統構法の素晴らしさを伝えていく方が、余程早いでしょうね」

と池田さん。建築界に限らないが、本当に大切なことをわかっていない、わからうとしない紛いもの権威が幅を利かせている現状。お二人供、決して言葉を荒げたりはしないが、先祖代々の知恵の塊である伝統構法のすばらしさを、一人でも多くの人に伝え、火を絶やさずに再生していこうという深い想い、静かな使命感が伝わってくる。お二人の話にとても説得力があるのは、お二人にその深い想いがあるからに他ならない。

時折、池田さんが太くて長い火吹き竹を静かに吹く。勢いの落ちかけた薪の火が甦る。誰からともなく「火を見てるってのは、いいですね」の声。同感！

伝統と言うと、古いもの、後ろ向きと誤解されがちだが、とんでもない！「伝統＝基本」と捉えれば、古いも新しいもないし、前向き、後ろ向きもない。「基本」は常に「今」そのものなのだ。

囲炉裏の火と同じ。火を絶やさないためには、新しい薪をくべ、静かに火吹き竹を吹くだけでいい。火は燃え続ける。「火」とは正に「今」そのもの。

昨5月13日、棟梁の納富さんに誘われて、飯塚の伊藤伝衛門の邸宅、新宮町にある千年家（横大路家）を見て来た。両所とも、伝統構法の見事さ、職人の技の凄さに思わず唸ってしまった。

８０５年。伝教大師（最澄）が唐から帰国した折りに持ち帰ったという"法理の火"。その火を１２００余年の間、絶やさずに守り続けている横大路家。そのかまどの火を見た時には、思わず震えがきた。１５７１年に信長が焼打ちして絶えてしまった、比叡山延暦寺の法灯は、この横大路家の火を親火として再び灯されているという。そう、親火さえ絶やさなければ、いつでも再生できるのだ。

来たる6月27日の日曜日。佐賀の古民家に学ぶ会と夢木香の企画で、池田、増田両氏を佐賀に呼び、講演会とパネルディスカッションが開かれることになった。紛いものの講演会は山程あるが、本当に大切な、本物の講演会は滅多にない。これから家づくりを考えている人たちには特に、お二人の話を聞いてみることをお奨めしたい。日本古来の伝統構法が、決して古色蒼然とした過去の遺物などではなく、正に「今」そのものの表現であることを、無理なく納得していただけるだろう。奮ってご参集下さい！

講演会　子どもたちの未来へ夢のある住まいを　主催 佐賀の古民家に学ぶ会

明治以来、近代化を目指してきた日本は合理性を追求し続け、工業化製品が氾濫する世の中になってしまった。古くはイタイイタイ病や水俣病の公害から近年シックハウス症候群や化学物質過敏症など新しい症例が問題視されている。国家の能力というものが、はるか太古からの人間の血と汗と涙の結晶にあるとしたなら、自然と共存する文化をもつ日本の伝統文化を子どもたちに伝承し、夢のある社会をつくることが急務だと考えます。

日時 平成22年6月27日（日）13:00～17:30（受付12:30～）
場所 佐賀大学経済学部第４号館（講義棟２Ｆ）
【講師】池田武邦氏「超高層から茅葺へ」
増田一眞氏「伝統技術と日本の山林を守ろう」

有限会社 夢木香 http://www.yumekikou-happy.com フリーダイヤル 0120-835-832

セミナー開催!!!　日時 22年7月4日（日）13:30～15:30
場所 佐賀市交流センター 佐賀市白山2-7-1 エスプラッツ3F
「子どもたちが危ない!!! 身近に潜む化学物質過敏症」
NPO シグナルキャッチ 代表 鹿児島ひとみ氏
「土壁のさわやかさの秘密」一級建築士 和田恵利子
お問い合わせ お申込み先 （有）夢木香までTEL、FAX、メールにてお願い致します。（先着30名様）

設計・施工
有限会社 夢木香（ゆめきこう）
0120-835-832
http://www.yumekikou-happy.com
e-mail : yumekikou@globe.ocn.ne.jp
TEL 0954-69-8333 / FAX 0954-69-8334
佐賀県鹿島市大字三河内甲 2487
日本民家再生協会正会員